

竹内 長雄（たけのうち・のぶお）

1、プロフィール

民俗学者、詩人。大正6年、國學院大学附属高等師範在学中に、南津軽郡女鹿沢村でイダコ桜庭スエから、「お岩木様一代記」の筆録に成功した。

<生没>

1911(明治44)年10月26日～1944(昭和19)年1月17日

<代表作>

「お岩木様一代記 一津軽イダコの一詞章―」 「文学」第8巻第10号(岩波書店)所収、「お岩木山の話 一津軽民間伝承学の一側面―」 「月刊東奥」(東奥日報社)連載

<青森との関わり>

青森市出身。國學院大学在学中に、民間伝承学の研究を志す。県立弘前高等女学校に奉職しながら、岩木山信仰などの論考を発表した。

2、作家解説

昭和2年、青森県立弘前中学校から國學院大学附属高等師範第二部に進学し、折口信夫から民間伝承学を学ぶ。同5年には「郷土誌 むつ 第二輯」(陸奥郷土会)に、西津軽郡大戸瀬村大字関村の年中行事、村社八幡宮の祭礼などを精細に調査した「西の関 西津軽郡大戸瀬村大字関村のことども」を発表し、高い評価を得る。同6年夏には同郷の今井富士雄とともに、南津軽郡女鹿沢村下十川に盲目のイダコ桜庭スエを訪ね、「お岩木様一代記 一津軽イダコの一詞章―」(以下「一代記」)の筆録に成功する。「一代記」は、主人公あんじゅ姫が数々の無理難題を解決して、お岩木山の高神様となる物語なのだが、桜庭の暗唱文を竹内が筆録したのである。

同15年10月に、「一代記」は柳田國男の推挙によって、「文学」第8巻第10号(岩波書店)に、「民間文藝の考察」特集号の一篇として発表された。時を経て同

47年、森山泰太郎によって、『日本庶民生活史料集成 第17巻 民間藝能』（三一書房）に収録され、にわかに「一代記」は脚光を浴びることになる。平成19年1月から同21年7月まで、坂口昌明は「岩木山奇談集」を「陸奥新報」に連載し、仔細に亘って「一代記」の解説・対訳を試みた。さらに、同22年に『お岩木山一代記』（津軽書房）を上梓。同24年の『安寿 お岩木様一代記奇譚』（ぷねうま舎）は、坂口の遺稿集となった。

竹内は優秀な民俗学学徒として、昭和8年の卒業時に学長賞を授与される。千葉県中山尋常高等小学校代用教員を経て、同19年まで県立弘前高等女学校教諭として奉職した。この間、民間伝承学の研究に励み、同15年7月から9月にかけて「お岩木山の話 ―津軽民間伝承学の一側面―」「月刊東奥」（東奥日報社）を發表した。また、手市典麥の筆名で叙情詩を創作した他、高山三五郎の筆名で同10年「弘前新聞」紙上を賑わせた津軽方言詩論争の論客でもあった。昭和19年1月8日、弘前市での陸軍始に参加したが、風邪をこじらせ急性肺炎となり、同月17日弘前市植田町の自宅で逝去した。

3、資料紹介

○「文学」第8巻第10号

雑誌

1940(昭和15)年10月1日

220 mm × 147 mm

昭和6年、イダコ桜庭スエが口誦し竹内が筆録した「お岩木様一代記 ―津軽イダコの一詞章―」は、同15年10月、柳田國男の推挙によって、「文学」第8巻第10号(岩波書店)に、「民間文藝の考察」特集号の一篇として發表された。